

■実は多い!結核の発症

当院の位置する東住吉区の結核発症は多く、決して「昔の病気」ではありません。結核は現在でも毎年全国で約2万人、大阪府は全国で最多の2千人以上の方が新たに結核を発病しています。大阪府では結核罹患率全国ワースト1である状況が続いており、平成24年度には大阪府結核対策推進計画が策定されました。日々の診療の中でも結核に関する感染対策が必要です。

■早期発見・早期治療が大切

結核を早期に発見し、早期に治療を開始することは患者さん、家族、医療従事者など多くの方々を守り、地域における結核の発生抑制につながります。2週間以上咳が続く、痰が出る、微熱、食欲や体重の低下など結核を疑う症状がある際は、積極的に検査を行うことが大切です。

感染経路	空気感染 咳やくしゃみに含まれる飛沫核が空中を漂い、それを吸い込むことで伝播する。
感染対策	空気感染予防策 <ul style="list-style-type: none"> <li>病室は個室対応とし扉は閉める</li> <li>空調は陰圧設定もしくは1時間6~12回の換気を行う</li> <li>呼吸保護のため医療従事者、面会者はN95マスクの装着を行う</li> </ul>

\*N95マスク：空気感染を予防するマスクとして0.3μmを95%以上ろ過する特殊なマスク



■N95マスクを正しく装着するための活動

せっかくN95マスクを着用していても、空気が漏れては意味がありません。当院では、N95マスクの装着のトレーニングの一環として装着方法指導を実施しています。また全職員を対象に機械を用いて漏れ率の測定を行い、正しい装着方法を習得するフィットテストを実施しています。フィットテストでは、漏れ率が数字で分かるので、マスクが顔にフィットしているか、装着の際にどこが漏れやすいかなど個々の顔貌に合わせて、装着するポイントを習得できます。医療施設では、いつでもN95マスクを適切に着用できるよう必要数を設置し、日常からトレーニングを行うことが大切です。当院では、今後もこのような研修やテストを定期的に行いたいと思います。

編集後記

広報室 M

先日、種苗屋さんにバジルの苗があるか見に行ったんですが、そのお店にはなんと!! 異界が広がってありました! 入るといきなり凶暴そうなウツボカズラやハエ取り草が、陳列されているではありませんか。よく見ると店内にはエキゾチックで珍しい種苗が沢山あり、気がついたときには既に沢山の妙なデザイン草木を買ってしまいました。バジルは、次回まわしにしたいと思います! (笑)



東住吉森本病院 地域医療連携センター

診察・検査・入院のご依頼、その他お問い合わせ  
(地域医療機関・施設さま専用)

メールアドレス: m\_chiiki@tachibana-med.or.jp  
電話: 0120-65-0343 FAX: 0120-10-5260

【受付時間】 平日 9:00~20:00  
土曜日 9:00~17:00  
地域医療連携センター長 辻口 幸之助  
副センター長 井内 郁代

\*東住吉森本病院のホームページでも情報が日々更新されております。 <http://www.tachibana-med.or.jp>

【院長挨拶】

8月を迎え、リオ五輪への期待とともに不安も高まってきました。4年後の東京に向けても色々な問題が指摘されていますが、「リオよりましか」という安易なことではなく、素晴らしい大会を目指してほしいものです。さて、当院では今年度の診療報酬改定に合わせ、7月よりICU8床をHCU(ハイケアユニット)へ変更いたしました。これに伴い、病院全体の看護体制についても、7:1看護体制の維持に加えて、看護職員夜間配置加算の2.看護職員夜間16対1配置加算も取得する予定です。

なお、私事ですが、本年9月15日でもって院長を退任させていただき、後任には現・寺柿副院長がご就任されることになりました。引き続き職員一丸となって地域に信頼され愛される病院を目指して頑張らせて参りますので、これまで同様のご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成28年8月 院長 田中 宏

【大阪市大・海外研修生の1日救急・総合診療センター研修】

去る7月22日、大阪市立大学医学部附属病院・救命救急センターよりインドからの研修生(医師2名、看護師1名)が、民間病院の救急を視察するという目的で来院され、当院の救急・総合診療センターにて1日研修を実施いたしました。

研修は、池邊副院長より救急外来の機能や診察のプロセスなどの概論に加え、実際に来院された患者さんの症例解説などを行いました。研修医からは、エコー画像を供覧しながら症例の診断基準などを質問したり、看護師からは、当院の救急外来で使用している問診表などについて熱心に質問されていました。当院にとっても大変貴重な体験となりました。



【心臓血管外科外来のお知らせ】

当院では第2・第4金曜日の午後、心臓血管外科外来を行っております。大阪市立大学医学部附属病院の心臓血管外科・専門医が、地域の医療機関様方からのご相談に対応させていただいております。当該科領域の症例、また、気にかかる症例等ございましたら遠慮なくご紹介いただければと思います。

毎日とても暑い日が続いています。といいながら1日の大半は冷房のきいたところで過ごしています。小学生の頃に比べ、格段に汗をかくことが少なくなりました。ビールがとてもおいしい季節になってきました。といいながらビールと発泡酒の違いがわかってきたのはつい最近のことでした。小学生の頃はファンタグレープをよく飲んでいました。

医師になって15年、整形外科の数ある専門分野の中で人工関節を専門にするようになり、今年で10年が経ちました。東住吉森本病院へは平成24年4月に赴任し、今年で5年が経ちました。この5年間で多くの先生方から多くの患者様をご紹介いただきました。先生方の診療にご協力させていただくことで本当に多くのことを勉強させていただきました。

より大きな基幹病院や、今流行りの人工関節センターでは、人工関節を専門にする整形外科医が数名います。以前はその中に埋もれたまま深くを考えずに毎日を過ごし、外来、病棟、手術と毎日の決まった業務をこなすだけで任務は遂行したものと勝手に満足していました。

東住吉森本病院へ赴任してからは、人工関節にまつわる診療や手術をひとりで担うようになり、これから一人前の整形外科医として育っていく若い先生方の教育や指導にも携わるようになりました。そんな日々の中、地域の多くの先生方から患者様をご紹介いただいた時、「この患者様にとっての幸せとはいったい何やろう？最後のゴールはどこにあるんやろう？」と人工関節だけでなく様々な背景を考えるようになりました。

人工関節のカタログを見ているとそのシルエットやフォルム、そしてデザインがたまらなく愛おしくなり、気分が高揚する時があります。できることは限られていますが、これからも多くの先生方の診療のお手伝いをさせていただきたいと考えております。また、機会があれば講演会などで人工関節にまつわる面白いお話を通じて、先生方と仲良くさせていただければと思っております。



緩和ケアは、がん治療を終えてから始めるものではありません。からだやこころのつらさが大きいと、体力消耗につながり、積極的ながん治療を続けることが困難になってしまいます。そのため、がんと診断されたときから、つらさを和らげるための緩和ケアを始めることが大切になってくるのです。

今回は、がん治療と同時に行う緩和ケアのご紹介をいたします。がん治療と同時に受ける緩和ケアは、主治医の他に、「緩和ケアチーム」が主に担当することになります。がん診療連携拠点病院には、緩和ケアチームを設置することが厚生労働省より義務付けられています。これらの医療機関では、入院治療、外来治療に関らず緩和ケアを受けることができます。大阪府がん診療拠点病院である当院にも、緩和ケアチームがあります。チームメンバーは、身体面担当の医師、精神面担当の医師（非常勤）、がん関連の認定看護師だけでなく、病院長が必要と認めた緩和ケアに精通した看護師や薬剤師、医療相談員、管理栄養士、理学療法士で構成されています（表1）。緩和ケアチームの診療は、主治医や担当看護師から提案されることもあります。患者さんやご家族から希望することもできます。つらい症状が続いている場合には、我慢しないで緩和ケアを選択されてはいかがでしょうか。

<外科病棟ラウンドの様子>



<表1 緩和ケアチームの職種とその役割>

医師	痛みや呼吸困難などの身体面の症状緩和を担当する医師と、気持ちのつらさなどの精神症状の緩和を担当する医師が、主治医へ治療に関するアドバイスを行います。
看護師	患者さんやご家族の日常生活についてのアドバイスを行います。転院や退院後の療養生活についての調整も行います。
薬剤師	患者さんやご家族に薬物療法のアドバイスや指導を行います。また、医療者に対しても専門的なアドバイスを行います。
医療相談員	療養にかかわる助成制度や経済的問題、仕事や療養する場所、ご家族の社会生活についての相談などを担当します。
管理栄養士	飲食全般にかかわる問題に対応します。食材や調理法などについてのアドバイスを行います。
リハビリテーション	日常生活維持のためのアドバイスやリラクゼーションを行います。また、リンパ浮腫に対する治療も担当します。